

「インタープリターが知っておきたい 最新のプレゼンテーションスキル」

川嶋直（公益社団法人日本環境教育フォーラム／日本インタープリテーション協会）

キーワード：インタープリテーション、KP法（紙芝居プレゼンテーション法）、KPPS（KP法ポスターセッション）

1. はじめに

インタープリター（IP）はどうメッセージを伝えているか？
・「話す」「実物を見せる」「拡大して実物を見せる」「写真を見せる」「イラストを見せる」「話しを見せる」…ここまではインタープリターから参加者に向けたもの。

・「感じてもらう」「考えてもらう」「（絵や詩などを）創作してもらう」「共有してもらう」…このあたりは参加者自身がする（してもらう）こと。

上記の全てを構成（デザイン）してIPはメッセージを「伝えて」いる。（「届けている」の方が、上から目線感が無くて良い感じかも…）

伝える（届ける）内容と方法は…

その内容は…

- ・整理されているか？
- ・受け手の「今」とつないでいるか？

その方法は…

- ・キーワードは繰り返すことができる（思い出しやすい）ような「ワンフレーズ」になっているか？
- ・受信者は、耳（聞く）と目（見る）そして体験することで受け止められるように工夫されているか？

2. 伝える（届ける）言葉の量と見える化を意識する

アナウンサーが話す文字量＝1分間300字　つまり1秒＝5字
読むことができる文字量＝上記の1.5倍（450字）1秒＝7.5字
聞く＆読む同時だったら？（上記よりさらに少なくなる）
パワーポイントなどを使用する場合、話す文字量は大きく増やすことはできないが、見せる（読む）文字量は平気で数十倍にすることができてしまうことに注意が必要。

一度に表示される字幕は20文字まで、一行は10文字まで
上記を2～3秒で見せている。

（これは映画の日本語字幕の文字数の基準）

つまり映像を見ながら＆効果音や音楽を聞きながら読むことができる文字数は「このくらい」という感じ。

一般的にスピーチの区切り＝1文の長さ2分（つまり600字）

（KP法の場合は平均3～4分が一区切り）

また、初めて耳にする言葉（種名など）は「見える化」しないと受け手に届かない。漢字に見える化するとイメージの記憶が可能だが、カタカナは見える化しても記憶が難しいので注意が必要。

3. 野外で話し言葉（や画像）を見せる方法

間違いなく＆無理なく伝えるためには、やはり話し言葉を「見える化」することが肝心。そのためには「KP法（紙芝居プレゼンテーション法）」がある！

KP法、野外での使い方…

- ・参加者を使う＝参加者を掲示板代りにして掲示。数枚程度までしか掲示できないがKP法の用意さえあれば道具は不要
- ・自動車のボディを使う＝大きなバンタイプの自動車のボディ側面はマグネットも付くので良い掲示板になる。
- ・クリアファイルを使う＝一番手軽な方法。一覧性はないが、持ち運びが便利。追加加除簡単。自分の得意なコース毎にファイルを使い分けたり、育てたりもできる。
- ・タブレットを使う＝5人程までの少人数なら有効。KP法も写真としてスキャンで取り込めばパワポでKP法が出来る、また写真も綺麗に見せることができる。

4. KP法の新しい工夫（6月3日に実演予定）

KPPS（紙芝居プレゼンテーションポスターセッション）

10人以下の少人数であれば、野外でも室内でもケント紙などの厚紙を壁面として、そこに「強弱両面テープ」を貼り、小さなKP法のための即席壁面ができる。強粘着面をケント紙に貼り、弱粘着面をKPシート強弱両面として使えば、KPシートは何度も貼ったり・剥がしたりできる優れたもの。

KP法の紙のサイズもA6程のサイズのものを使えば、壁面は幅90センチもあれば充分。

A6サイズKPの作り方＝A4サイズのKPセットを持っているのであれば、それをスキャンして4分割印刷すれば簡単にA6サイズのKPができる。

参考文献

- 1) 川嶋直, 2013, 「KP法～シンプルに伝える紙芝居プレゼンテーション」みくに出版
- 2) 川嶋直, 2016, 「KP法実践～アクティブラーニングに導くKP法実践」みくに出版